

劇評 二〇一五年に観た舞台から

著者	松井 哲朗
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	10
ページ	30-36
発行年	2016-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002133/

二〇一五年に観た舞台から

松井哲朗（劇評誌「続・観劇片々」主宰）

昨年的一年間に九六本の演劇舞台と、その他に短編の演劇作品五七本の合計一五三本を観た。短編とは三〇分〜一〇分くらいの作品で一回に三〜五本くらいを観る事が多い。

それらの中から道内で上演されたものに限って次の諸作品を観劇日の順にご紹介したいと思う。すべて僕の観劇随想個人誌・季刊『続・観劇片々』第48号〜51号から抜粋・要約したものである。

『PLAY』 札幌座

原作Ⅱサミュエル・ベケット

翻訳Ⅱ安堂信也・高橋康也 構成・演出Ⅱすがの公

劇場名ⅡシアターZOO 二月二八日

迷路の非日常性

何時もの劇場への入り口が違っていた。正面のドアの隣にある楽屋へ通るドアが客席の入り口なのだ。すがの公が一三年一二月に創った『ロックスム万能ロボット会社』もサンピアザ劇場の客席正面入り口ではなく上手廊下か

ら入って行く設定になっていた。さらに一四年八月に観た南参・作・演出のYhs『つづく』も劇場コンカリニヨ裏手の道具搬入口からの荒涼とした入口だった。いずれも別世界への誘導だろうか。

劇場・ZOOの楽屋通路は色んな用途の小部屋にも通じる廊下が狭く曲がりくねって段差があり、スタッフが懐中電灯で足元を照らしている。わざと快適ではないイメージを創っているような、別に言えば一種のワクワク感がしないでもない。

いつもの舞台が客席で、此処から今日の舞台である客席を観ると仰ぎ見るような感じ、しかも気のせいかな遠くに見える。そこには陶器製のような高さ二メートルもある大きな壺が三個並べて置いてあって、上部の口には人間の顔を型取った首の形の蓋のようなものが置かれている。

冒頭、異常にテンポは遅いのになチンドン屋さんのワクワク感のような音楽が、ブツ壊れたテンポと非協和音なのに、お祭りの狂騒のような異常な協和性がある。

場面が転換して明るくなると、壺の顔は生きている本物の人間の顔である。妻と浮気相手の女の二人に囲まれ

松井哲朗氏の「続・観劇片々」のサイト
<http://www.ragu203.com/cms/matsui.html>

た真ん中が夫の三人だ。壺は人間のようにには動けない顔だけの男女の、これも動きのとれない男女関係か。壺で表される三角関係の身動き出来ないことと、実際の三人の身動き出来ない関係の象徴。男女の他愛もないありきたりの三角関係のグチと正当性の主張だけの四〇分。様々な象徴と見える。

死後まで引きずる怨念とも見えるし、僕はそれぞれの夢の中の自己本位の葛藤とも見えた。同じやり取りの台詞がながながと繰り返されたのは閉塞感だろうか。照明を当てられた人物だけが一方的に喋り捲ると、一瞬後には別の明りを当てられた人物が喋る、また次の瞬間には三人に一斉に光が当てられると三人は一緒に別々のことを喋る、何を言っているのかまるで分からない。

いきなり真つ暗になつて終わる。何の告知もなく、終わったことすら判然としない。客席は茫然としている。カーテンコールもアナウンスもない。大きな壺に閉じ込められた三人の男女は一体何だったのか？ 彼ら彼女らは何だったのか？ 不思議だがインパクトの強い存在で既成演劇の概念にはまったく存在しない四〇分ではあった……

『PLAY』というタイトルは、こういう不安定な人間関係こそ、架空の存在であるお芝居だということだろうか？ 固定化されていることが不条理なのか？ 固定化された中でどう生きるのか、生きられないのか？ が不条理だとしたら、これは三人の言いたい放題であり現実そのものの描写であり不条理とは言えないのではないか？

この物語は、井伏鱒二『山椒魚』のイメージでもあり、「どうにも動かしようのない人生の現実に対して虚勢を張りながら無力を自認せざるを得ない自己の精神の戯画

（中村光男）なのである。『山椒魚』は、後年「反目と死」のシーンをカットして「山椒魚と蛙の互いの存在を黙認して生きる」で終わることになる。『PLAY』は「死」も「互いの存在黙認」も描かれない。

この話は、単なる男女の痴話喧嘩なのに動きの取れない人間関係の基本、ひいてはあらゆる集団や大きくは国家間の関係までも想像させる不条理の基本形のようにも感じられた。

『PLAY 芝居』 風蝕異人街

作Ⅱサミュエル・ベケット 演出Ⅱこしばきこ

劇場名Ⅱアトリエ阿呆船 四月一二日

全く別物の舞台

二月に、すがの公・演出『札幌座』のこの舞台を観た後で、いろいろと想像していた。基本的には死者である三人三様の怨念・焦慮・自己主張そして断罪などのマイナス面の葛藤なのであるかと思つたが、これを生きている人達の閉じ込められた心境として表現したらどうなるだろう。

閉塞状態の中での混乱と軋轢を象徴的に描いていると思つたので、逆にその閉塞状態を固定された硬い壺じゃなくて、例えば紙製の壺にしたらどうだろうか？ 中に入っている人間はがんじがらめに動けなくなっているというのは思い込みで力を入れれば破れるよ、とでもいうような紙製の壺だとうなるんだだろうか。その紙製壺の裏から照明を当ててシルエツトで映せば、滑稽に動く人物が見えるかも知れない。その人物は裸体だったりしたらどうだろうか？ スーツ姿だったら？ さらに、その壺が透明のプラスチック製だったら、どうなるだろうか？

全く壺の形の枠だけの、壺と思い込んだだけの何も無い壺の形だけだったら、どうなんだろう？などとエスカレートして空想・妄想を大いに楽しんでた。とうとう「一壺天」の故事までも想像は膨らんだのだが、それはちよつと世界が違うかなとも思うけれども……

何故そんな妄想が産まれたのかというと、この大道具である壺が、劇団『MODE』の壺を『札幌座』が譲り受けて、さらにそれを『風蝕異人街』が使うという話を聞いて、単なる使い回しじゃないのかと義憤を感じたからなのかも知れない。

だが今日の舞台は『札幌座』とは全く違った印象で、違う台本じゃないのかとさえ思つたくらいだった。すぐの演出は、直接的な三角関係の痴話喧嘩そのもののようで、それはそれで人生の一つのPLAYYここでは芝居じゃなくて遊びというか虚偽的な人生の一断面というか、それに対して、こしば演出は冷静で客観的な解説のように感じる。

いつ始まったのか、いつ終わったのか、突然始まって気が付いたら終わつていてという一場の幻影の方が良いような気がする。だから終演後の挨拶は不要だと思つた。いきなり強制的に現実に戻されると違和感が強い。

開演前に燕尾服の男が恭しく客席の最前列のその前に自分で出した椅子に座つて一人の観客となる。暗転で椅子ごとに出て開幕となる。ただその椅子が燕尾服に似合わない学童が学校で使うような木製の骨だけの粗末な椅子だったのは、これもPLAYYなのか？それとこの戯曲の翻訳者の記載が無かったのが不審だと思う。『札幌座』とは違う翻訳者の本だったかも知れない、などと思つたほど異なる印象を受けたからだ。

『MW』劇団アトリエ

脚本・演出Ⅱ小佐部明広 原作Ⅱ手塚治虫『MW』
劇場名Ⅱ琴似・コンカリーニョ 四月二五日

抽象的・象徴的に表現した

沖の真舟島という小島でMWという秘密の毒ガス化学兵器が漏れて島は地獄と化す。これは福島の前言だろうか、そのショックがトラウマとなって育つたエリート銀行マン・結城美知夫は、連続凶悪犯罪者としての裏の顔があった。この複雑怪奇な話を、ほとんどその通りに展開する、といつても具体的にではなく視覚的には象徴的・抽象的な描き方であり、全体に真っ黒な舞台に黒の礼服姿の人物たちが話を進める。

舞台にはほとんど何も無い。あるのは三本の柱だけで、その柱の天辺には鬼女とも言われる女性の怨念を表す般若面、お亀とも言われる女性の福を表すお多福の面、そして道化役のひよつとこ面の三つがそれぞれに掲げられている。その三本の柱を動かして様々な場所を暗示させるという単純で象徴的な場面設定だけで舞台は進行する。やはり黒装束の群衆が出入りし、その中の何人かがこの三本の柱を動かすのだ。結城美知夫の原罪が科学のもたらす悲劇の末期を表す舞台なのだろうか？

『山がある。』Theater・ラグ・203

作・演出Ⅱ村松幹男
劇場名Ⅱラグリグラ劇場 六月一〇日

日常の不安、不安の中の日常

山頂近くで崖崩れのために孤立した二人の見知らぬ男

女。ケータイも届かない場所だ。偶然、道端に置いてあったベンチに掛けて悲運を語り合う。突然「ベンチに乗せる重量が五百^{キログラム}を増減すると三秒後にベンチは爆発する」という声が聞こえる。

傍の大岩の根元にあつたスピーカーからの声だった。慌ててそのスピーカーに寄ろうとすると「一、二」という秒読みの声がするので慌ててベンチへ飛び戻る。すると声は消える。何か物を食べようとベンチの下に置いたリックサックを取り上げると「重量増加」という声が聞こえる。

二人はにっちもさっちも動きが取れない一種の迷路にはまつたのだ。……現実の我が身と意味不明の在り得ない我が身とのギャップ、現実の我が身には当然、起こり得ない展開……そのやりとりが延々と続く。現実には見えないところで何かが起きている、それを知らないただとも言えるのだろうか？そして二人は何時の間にか連帯意識が恋に発展していることに気が付く。

場面は転換して恋人の二人は高級レストランの個室に居る。食事をしようとする店内のスピーカーから山の中と同じ声がする。傍の携帯置き場から携帯電話を取ろうとすると、やはり秒読みの声がする。二人の座っているテーブルは、ちょうどそのテーブルと二人の椅子だけを載せるだけの大きさの赤い絨緞の上に置いてあつたのだ。

そういう現代的な潜在意識をエンターテインメントに転換した力技は凄い。演劇の最大の魅力だ。平常の日々に意味不明の恐怖は常住し、意味不明の恐怖の中にも日常はある、というような現代の日常の不安を象徴しているのだった。この恐怖は現在の現実の独善的な悪政の恐怖に当てはまるのだと思えた。

『ルル』札幌座

原作Ⅱフランク・ヴェーデキント

『地霊・パンドラの箱—ルル二部作』

翻訳Ⅱ岩淵達治 演出Ⅱ橋口幸絵

劇場名ⅡシアターZOO

六月二八日

諦観にも似た一種の恐怖

圧倒的に女性という性的魅力を持った女性ルル。本能的にその魅力を縦横に放出して、すべての男たちに対し、対されたすべての男たちは、そのために破壊へと追い込まれる。その経緯は男女の関係を象徴的に表現しているのだが、すべての人間関係や集団や大きくは国家間の関係までも象徴しているような気がする。

前半は、そのおぞましいまでの男女関係に、人間の一種の業を感じて自分だったらどうなるだろうと怖くなるのだが、後半になつてルル自身が破壊してゆく展開には恐怖を通り越して人間あるいは女性という存在そのものにさえ否定したくなる、という心境にまで陥った。その繰り返しは想像を絶し拒否反応さえ出て、止めてくれ！と叫びたくなるが目を放すことも出来ない。男たちやルルが大荒れするとき壁が揺れたり飛び散る血が嘔くさいのが現実を知らせてくれて、やはり虚構の世界だと目覚めさせやうと何とか落ち着く。それほどルルの体当たりの演技はまさに迫真的で怖い存在でさえあつたのだ。

エキセントリックなダンスシーンと破壊的な音楽が表現する、人間のある種の本質を描いたこの恐怖の舞台は、ずっしりとわが心の中に重い錨を落とし込んで忘れられない舞台になったのだった。

『HORROR』

専門学校札幌ビジュアルアーツ・パフォーマンス学科

脚本・演出Ⅱ嶋口萌々子

劇場名Ⅱコンカリーニョ

七月一日

過去の現実とは現在の大きな恐怖

薄暗く乱雑に散らかった舞台いっぱいに、亡霊のような黒装束の大勢がそこに屯して蠢いている。若い女性三人、声を忍ばせて互いの名を呼び交わし、その中には「お母さん」という声も聞かれる。爆撃機の轟音、緊急サイレンの咆哮、交錯する地面からと中空からの激しいライト、連続して炸裂する爆発音。突然、昭和天皇の終戦詔勅、うつすらと明るくなると『リングの唄』が陽気に聞こえる。だがこの唄は一小節だけが次々と被せられて狂ったように繰り返されるだけだ。と、突然再び空襲警報のけたたましいサイレンが禍々しく鳴り響き、それが何度も何度も繰り返される。

それだけの一〇分ほどの象徴的で抽象的な情景描写、だけこの短いシーンに若い人たちが込めた恐怖の心情は、僕の心を大きく打って過去の恐怖を引きずり出したのだった。

最近、この『リングの唄』が、若い人たちの吹奏楽団のレパに入っているのを知ってビックリしてすごく嬉しかった。この『リングの唄』は七〇年前の敗戦直後、そのころ少年であった僕が親の商店を手伝っていたとき、平和になって出来たばかりの街頭放送のスピーカーから毎日流されていて今でも歌えるのだ。それだけに、この場面に使われていることに一層、他人ごととは思えない恐怖心が強かったのだ。

『door』 劇団ミセヨルド

作Ⅱ万代菜月 補作・演出Ⅱ劇団ミセヨルド

会場Ⅱ雑貨カフェバーキルティンダビー

九月一日・一九日

少女の変化する一夜

高校受験を控えた一五歳の少女・ハルは母親のいない家庭で、アル中の父親と二人っきりの家庭は孤独だった。ある夜、観た映画に感化されたハルは厚化粧をし大人の格好をしてフラツと知らない深夜のバーへと迷い込む。

そこはゲイのマスター（ママ？）が一人で営んでいる店で、客はギターを弾く無口の中年男が一人静かに飲んでいた。そこへ甚平姿で顔中髭だらけの男が来る。リングジュースを飲みながら何かオドオドとして本を読んでいるが落ち着かない。

ハルは何となく大人っぽく振舞おうとしているが、自分の事情を話しているうちに未成年だとバレてしまう。事情を知ったマスターは何とかが宥めて帰そうとするが、ハルは開き直ってしまう。

髭男は詩集を何冊か出し、マスターもハルも知っている映画の脚本も書いた事が分かる。だが今は自信喪失したナイーブな中年男だ。

常連のセレブな婦人が来る。格好よく高級ワインを飲むが、一口飲むと突然、訳の分からない声を挙げてカウンターに突っ伏す。何か家庭の事情がありそうだ。マスターは手馴れた調子でうまく扱って静かに帰す。

ハルは徐々にこの店の雰囲気馴染んで行く。マスターも詩人もいわゆるマイナーな存在の人たちだ。ギター弾きもセレブ婦人もやはりなにかの宿命を背負った

落ちこぼれの人たちかも知れない。ハルは自分だけではない、そういう人たちとの間に何か心情の繋がりをを感じる。マスターはハルの詩心を感じて髭男を励ますつもりで三人で詩の競作を提案する。ハルは自信満々、髭男はダメだダメだと自己否定しながらも、それぞれ詩作に向かう。ハルは少女らしい詩を創り、髭男は「door」の向こうに新しい風景が開ける」という詩を書いた。ハルはマスターに母親のような愛情を感じる。

これを観ていて僕は吉本はなの小説を思い出していた。道新九月二七日読書欄に東京報道・上田貴子氏が「経験基に励ましメツセージ」というタイトルで吉本はなの小説の紹介をしている。まさに作者の万代菜月に共通する心情で僕はその上に叶わない愛情の裏返しという良い意味でのファザー・コンプレックスをも感じたのだ。一番頼りになる筈の父親との断絶に悩む娘が、そのやりどころのない精神的苦悩を、その父親にぶつけ返す精神的な逆転反応がファザー・コンプレックスだろうと思う。アル中で自分に無関心な様子の父親像にそれを見る。哀しくも暖かい心情の現実だ。

『星女郎』 実験演劇集団 風蝕異人街

作 泉鏡花 潤色・演出 しばきこう

劇場名 ことにパトス 十一月一八日

作家や女たちの心情の世界

性を売る女郎が純潔の象徴の星の心情を持つ女である物語。昭和初期の雰囲気を持つカフェバー、赤黒く複雑な格子模様の壁面には西欧女優たちのブロマイドが一面に貼ってありジャズ音楽が流れ、売出し中の青年作家が下駄ばき姿で呻吟している。

昼間から飲んでいるママと、その姉と称する初老の女性との他愛のない雑談。客が居なくて廃業寸前の、このカフェに突然、大きな荷物を背負った老人が入ってきて「ジャロ」とだけ言つてキリマンジャロを注文する。青年作家は、その老人を死んだ伯父だと思ひ込む。作家はかつて、その伯父から星女郎の話を聞いていたのだ。カフェの壁面である中幕が割れて神秘的な情景が現れ、そこで作家はママの別人格に惹きこまれて行く。

リアリティの強いカフェを舞台にして、その奥に突然現れる作家や女たちの心情の世界を表現したのは、鏡花の世界を百年後の現実世界に持つて来て夢幻の心象風景として表現しようとしたのは卓見だと思う。だがリアリティのあるこの世界も現代から見れば時代劇だ。思い切つて二〇一五年の世界に描かれなかっただろうか？

『大海原にて』 札幌座

作 スワボミール・ムロジェツク

翻訳 工藤幸雄 脚色・演出 弦巻啓太

劇場名 シアターZOO 十一月二一日

リアリティのある虚構が現実の矛盾を表す

船舶の事故に遭遇して世界と一切の連絡が取れなくなった筏で漂流する三人の船客だった男たちが、取りあえず今を生き延びるために、三人の中の誰かを食べる事が提案される。

さまざまな誤魔化しや二人ごとの密約などがあつて、一人が犠牲になりそうになった時に、郵便配達人が海を泳いで手紙を届けに来たり、一人の男の家の下女が来て、三人それぞれの嘘がばれそうになったりするが、それらは幻想であると処理されて、一人が人身御供になるとこ

ろでカットアウト。

この物語はデモクラシーや独裁のメタファーである寓話ではなく、不条理劇なのだと思う。すべてが仮想の設定であるが、リアリティのある設定が混じる方が寓話の世界よりも不条理の世界、現実の象徴として鋭く深く表現できるのだ。確かにこの舞台は違和感をもったりリアリズムなのに逆に物語の嘘を暴き出して現実を炙り出しているのだった。

『空の村号』 座・れら

作 篠原久美子 演出 戸塚直人

劇場名 〓 やまびこ座 一月二八日

無心の子供達の活躍が

被災者たちの悲しみや苦しみを際立せる

三・一一の東北大地震で直接の崩壊や津波の被害には遭わなかったが、日が経つにつれてジワリと襲う原発放射能の被害から避難せざるを得なくなった一家の悲劇が描かれる。

小学五年生の楠木空くんは単細胞の自称バカで、一学年下の妹・海ちゃんに万事を頼っていた。空くんの夢は金持ちになる事だったけど、何かをしなければ金を手にすることは出来ない」と知ると、TVで映画監督が謙遜で「自分は何もしない。スタッフに依頼するだけが僕の仕事である」というのを聞き、俄然、映画監督に憧れてヒーローもののDVDを見まくり悪をやっつける映画を作る監督になることに強烈に憧れる。

そのころ被災地のドキュメンタリーを撮りに来たTV

のプロデューサー兼任カメラマンと知り合いになり、怖い物知らずの空くんはそのプロデューサーと意気投合してくっついて歩きまわる。だが遂に家族たちとも別れて東京へ疎開する日が来る。

空くんは、この村を放射能という悪のモンスターを退治する「村号」という宇宙船にガキ友たちと乗り組んで遠征するというストーリーの台本を書いて勇んで東京へ旅立つのだった。

無心の子供達が活躍するコミカルでスピーディな展開の中で、被災者たちの悲しみや苦しみが際立ってくるのだった。

『糜爛くらんく』 Theater・ラグ・2003

作・演出 村松幹男

劇場名 〓 澄川ラグリグ劇場 一月一六日・二三日

Theater・ラグ・2003は六月に上演された『山がある。』を紹介したのだが、年末になつてこの作品が出てきた。

どちらにするか優劣付け難く、字数の制限でとても迷ったのだが、『糜爛くらんく』は、「一人の女の戦後昭和史」から「糜爛」の第二語義である「国の乱れ」にまで思いは至り、今後改稿され進化した演出で再演される期待は大きく、さらに一人芝居の新たな概念までも創り出しそうな予感さえも感じさせるので、今回は『山がある。』の紹介にした。